

名詞修飾節の日英対照研究

片桐史恵¹⁾・田路敏彦²⁾

A Contrastive Analysis of Noun-Modifying Constructions in English and Japanese

Fumie KATAGIRI and Toshihiko TOJI

本稿は、日英名詞修飾節の本質的な相違を究明し、その原因を明らかにし、日本人に対する英語関係節指導に資する提案を行う。まず最初に、日英関係節に見られる空所が、英語ではwh移動による統語的派生なのに対して、日本語ではゼロ代名詞であり、意味論的・語用論的に解釈されることを、フレーム意味論の枠組みを用いて明らかにした。次に、歴史的発達のプロセスを遡ることによって、このような差異が、日英では全く逆方向を辿り、英語では2文から1文への統合とwh疑問文の拡張により、完全な埋め込み文になったのに対して、日本語では本来名詞化節として完全な従属節だったのが、活用形の連体形への統一によって、高い文性を帯び、主要部名詞からの自立性獲得に至ったことに起因することを解明した。最後に、英語母語話者による英語関係節の習得、及び大人による使用実態調査を踏まえて、日本人英語学習者が歩むべき、英語関係節習得への道筋を示した。

キーワード：関係節、*pro*、wh移動、フレーム意味論、名詞化

1. 序

本稿の目的は、いわゆる関係節(relative clause (RC))の振舞いに見られる、日本語と英語の差異に注目し、それらの構造の根本的な違いを明らかにすることによって、日本人英語学習者にとっての習得困難要因を解明することである。また、それに基づいて、適切な習得へのロードマップも提示する。ターゲットとしているのは、次の(1)、(2)のようなRCである。

- (1) 太郎が昨日買った本
- (2) a book which/that/ \emptyset Taro bought yesterday

ここで一つ注意して頂きたいのは、本稿のタイトルでは関係節ではなく、名詞修飾節となっている点である。まさしくここに日英の本質的な違いが内在し

ているのだが、その理由はすぐに次章で明らかになるであろう。そこで、まず第2章では、日英それぞれのRCの構造、及びその意味解釈を詳述し、根本的に異なるストラテジーを用いていることを解明し、第3章では、そのような差異がそもそも何にその起源を發するののか、一つの可能性を提示し、第4章では、その分析を受け、我々日本人英語学習者は、いかにして英語RCを習得していけばよいのかに関して、第一言語獲得や用法基盤モデル(usage-based model)に依拠した、頻度(frequency)に関する研究からの知見をも取り入れた提言を行う。第5章はまとめである。

2. 日英名詞修飾節の構造

まず、次の(1)~(3)の日本語からの例に注目して頂きたい。

1) 人間福祉学部人間福祉学科 2) 箕面自由学園高等学校

- (1) 本を買った学生
- (2) 本を買った知らせ
- (3) 本を買ったお釣り

(1)~(3)ではすべて「本を買った」が後続する主要部名詞を修飾している。もちろんそれぞれの関係性は異なっているが、文脈が与えられれば完全に理解できる表現であり、何よりも重要なことは、同一形式の「本を買った」が使用されていることである。これらを英語で表現するとすると、(4)~(6)のように異なった形式を使わざるを得ないであろう。

- (4) the student who bought a book
- (5) the news that (X) bought a book
- (6) the change from buying a book

これらの事実から、RCだけに留まらず、いわゆる同格節や広く「外の関係」と呼ばれている表現を含めて、日英間には本質的な違いが存在することは自明であろう。そこでこれらの表現形式を総括して、名詞修飾節(noun-modifying constructions(NMC))と呼ぶことにする。

ではまず日本語 NMC の構造から詳細に検討してみよう。一般的に言われているように、日本語は文脈依存度の極めて高い言語である。例えば、昼頃に出会った太郎と花子の会話で、太郎が花子に次のような質問をした際に、その意味するところは明白であろう。

- (7) もう食べた?

もちろん「あなたはもう昼食を食べましたか」です。ところが同一内容を英語で表現するとすると、

- (8) Have you had lunch yet?

となる。つまり英語は誰が、何を、を明確に言語化しなければならない言語である。日本語は逆に文脈上分かり切っていることは言葉にしない言語である。とは言え、「食べた」という動詞が、意味的に「食べ手」と「食べ物」を必要とすることは明らかで、視点を変えると、日本語には音声形式を有しないゼロ代名詞(zero pronoun、あるいは small *pro*)が存

在すると言えよう。従って、(7)は厳密には(9)のように表すことができよう。

- (9) *pro*(は)もう *pro*(を)食べた?

ここで(1)と(4)を比較して頂きたい。(4)では自明に wh 移動が関与し、who が文頭に移動した結果として、RC の主語位置に空所(gap(ϕ))が生じている。第1章の(2)を見れば、そのことは一目瞭然であろう。ところが(1)では、そのような移動の痕跡は少なくとも表面上には存在しない。むしろその空所は、(9)で見た *pro* と捉える方が理に適っていると言えよう。以上の議論を踏まえると、(1)と(4)はそれぞれ(10)、(11)と表すことができる。

- (10) *pro*(が)本を買った学生
- (11) the student who ϕ bought a book

(10)では、「買う」という動詞には必ず「買い手」と「買い物」が必要であり、その欠落している「買い手」が主要部名詞(head noun)「学生」として表現されており、解釈的に同一指示(coreferential)と認識される。それに対して、(11)では、wh 移動という統語規則を通して、 ϕ 、who、the student が同一指示的であることが担保される。つまり、英語の RC と日本語のそれは全く別物であることが証明されたと言えよう。

更に、NMC の観点に戻って話を進めると、(2)と(5)では、(2)は(10)と同一構造を持つ。

- (12) *pro*(が)本を買った知らせ

この場合、「知らせ」が「買い手」の資格を有するはずがないことは、常識(world knowledge)であり、文脈上「買い手」となりうる人として *pro* は解釈され、あくまで「知らせ」の具体的内容が、「ある人物が本を買った」ということになる。他方、(5)に関しては、英語では *pro* が認可されないことを除いては、基本的に(12)と同様の構造を有していると考えられる。もちろん wh 移動の関与はなく、それ由来の gap も存在しない。ここで銘記しておくべきことは、少なくとも現時点で、英語には NMC に2種類あるということである。

最後に、(3)と(6)であるが、この(3)こそが、日本語 NMC の特徴を最も端的に表している構文と言えよう。次に例を追加しておこう。

- (13) 頭が良くなる本
- (14) 翻訳したお金
- (15) 食べたお茶碗
- (16) トイレに行けないサスペンスドラマ
- (17) 太らないお菓子
- (18) 美人になる温泉
- (19) 就職が難しい物理学

枚挙に暇がないが、(13)～(19)を見て、理解できないという日本人はいないであろうし、それどころか極めて日常的なものであり、かつ自然に受け入れられるものであろう。他方、英語の(6)でもそうだが、これらを英訳するにはかなり骨が折れるし、ほぼ英訳不能と思われるものもある。実際(6)でも全く発想を変えて、「本を買うことから発生するお釣り」というような解釈を施し、もはや節でさえなく、ing 形を取る前置詞句として表現せざるを得ない。

以上、本章で明確にしたことは、日本語では NMC を単一構造として扱うことができるが、英語では大きく捉えて2種類、日本語のものまで対応しようとする、それ以上の表現形式が不可欠となる、ということである。また日本語 NMC を詳述する際に用いた概念は、frame semantics(フレーム意味論)と呼ばれている意味論的・語用論的枠組みで、修飾節内にある述語によって想起される、述語フレームの場面(scene)の典型的成分である役割(role)が、意味論的・語用論的に、言い換えれば、世界知識や百科事典的知識によって、主要部名詞と強い関連性を有するものとして解釈できるか、ということによって容認可能性が決定される。つまり、英語 NMC は基本的に統語現象として捉えられるものであるが、日本語 NMC は意味論的・語用論的事象として扱わなければならないという結論が得られた。次章では、この日英の本質的な差異は、何に起因するのかを概観してみる。

3. 日英 NMC の起源

まず英語の RC の発達のプロセスから見てみよう。(1)のような連続体(continuum ないしは cline)が、言語類型論(typology)の観点からほぼ定説として受け入れられている。

- (1) parataxis > hypotaxis > subordination

parataxis とは、単なる独立した2つの節の並列で、juxtaposition とも呼ばれている。subordination とは、一方の節が完全に他方の節に埋め込まれている(embedding)、ないしは統合されている(integration)状態を指す。hypotaxis はその中間段階である。英語 RC もその例外ではなく、古英語(OE)では現代英語の表記を用いると、次のような形式を有していた。

- (2) There is the car; that (one) I like.

つまり、that という本来指示代名詞(demonstrative pronoun)を介して緩やかに繋がっていた。ところが、(2)に対して(3)のような再分析(reanalysis)が施されたのである。

- (3) There is the car [that I like].

まさに今日の関係代名詞 that の誕生である。そして次の段階として、既に疑問文で使用されていた wh 疑問詞が、間接疑問文へと広がり、RC にまで拡張されていったわけである。元々 that 以外の指示代名詞も使用されていたのだが、それらはすべて wh 疑問詞に取って代わられてしまった。現代英語の which や who は、このようにして中英語期(ME)になって生まれたのである。この辺りの経緯を端的に表しているのは、次のように wh-that が共起している例が、ME では頻繁に見られることであろう。

- (4) Only the sighte of hire *whom that* I serve
(チャーサー『カンタベリー物語』)

ここでは詳細に立ち入る余裕はないが、wh 疑問詞が関係詞として拡張されていった背景には、疑問文

も RC も共に、意味的に non-assertion であることが関係していたのかもしれない。以上の議論をまとめると、次のような図式となろう。

(5) $S_1 + S_2 > [S_1[S_2]]$

ここまで概観してきたように、英語 RC は、ヨーロッパ言語の統語構造における中核的規則である、wh-移動によって生成される完全な埋め込み文 (embedded sentence)、従属節 (subordinate clause) であることが明らかになった。ゆえに、主要部名詞、wh 関係詞、gap の間に厳密な同一指示関係 (coreferentiality) が成立していなければならないのである。では次に日本語 RC に話を進めよう。

まず最初に英語と同様、その歴史的発達から統語構造に迫ってみたい。(6)をご覧頂きたい。

(6) [[燕のもたる]子安の貝]を取らむ料なり。
(竹取物語)

一見すると現代語と大差ないように見えるかもしれないが、根本的な違いが2つある。1つは、動詞が連体形であること、もう1つは、現代語の主語に見えるものが、「の」でマークされていることである。前者に関しては、中世語期(鎌倉・室町時代)に終止形・連体形の統合、要するに終止形の消滅が起こったが、古代語においては、連体修飾節はまさにその名の通りの振舞いをしていたことになる。それを更に裏付けるように、属格(所有格)の「の」による格標示がなされている。古代語には主格マーカーは存在せず、主節(main clause(MC))では無助詞によって主語は標示されていた。従って、連体修飾節に現れる「が」や「の」は純粹に属格マーカーである。つまり本来的には(7a)ではなく、むしろ(7b)のように分析されるべきものであり、前者は逆に後者の再分析の結果であろう。

(7) a [我が行く]道
b 我が[行く]道

要するに、日本語 RC の起源は英語と異なり、あくまでも nominalized(名詞化)clause であり、全く文としての独立性を有しない、つまり文性(sententiality)

の低い、逆に言えば名詞性(nominality)の高い構文であったと言えよう。それが前述した終止形・連体形統合によって、定性(finiteness)を取り戻し、「が」の主格マーカーとしての定着と相俟って、独立した文として拡充(expansion)していったのである。その意味では、英語と真逆のルートを辿っているとも言えよう。その文性の高さは次例によく現れている。

(8) a [昨日差し上げました]海老は、もう召し上がりましたか。
b [お申し込みになりました]カードを発行させていただきます。

これらは一般に主節現象(main clause phenomena)と呼ばれるもので、丁寧さ(politeness)は基本的に聞き手を想定するものであり、対人的働きかけが大きくなり、より文らしさが高まると言える。但し、終助詞が現れることは決してない。

更に興味深いのは、次のような準体句の存在である。

(9) [そこら集ひ給へる]が、我もおとらじともてなし給へる中にも(源氏物語)

これは(6)とは異なって、名詞を修飾していないが、文脈上明白な人や物を指し、(9)では「方々」を意味しているのは明らかで、真の意味で、nominalization(名詞化)が適用したものと言ってよかろう。この準体句は近世以降「の」が後接された形式を取るようになり、今日に至っている。

注目したいのは、今ここで2種類の「の」が現れていることである。つまり、同一形態の「の」が、属格マーカーと代名詞という異なった機能を果たしている。詳細は避けるが、次のようなプロセスを経たのではないかと考えられる。

(10) 太郎の本 > 太郎の > 買ったの

もう一つ注目すべき表現として、主要部内在関係節(head-internal relative clause(HIRC))と呼ばれる、日本語独特の表現が存在する。

(11) [お母さんがリンゴを買ってきたの]を食べた。

「の」が完全な文に付いている。その点では極めて文性の高い表現と言えるであろう。HIRC の発生のプロセスとしては、「お母さんがリンゴを買ってきた」と「食べた」の本来独立した2文が、食べた物がリンゴであることが自明ゆえに、短絡的に「食べる」の目的語の位置に、「お母さんがリンゴを買ってきた」を nominalizer (名詞化辞) の「の」を付けて名詞化したものを、挿入することによって、1文へと融合されたのかもしれない。

最後に、日本語児の第一言語獲得に現れる「の」の過剰生成 (overgeneration) に着目したい。

(12) ブタさんがたたいてるの太鼓

大人の文法ではもちろん不要な「の」が、RC と主要部名詞の間に出現している。

以上の事実を踏まえて、日本語 RC における修飾節と主要部名詞との関係を、包括的に扱う枠組みとして、次のような基底構造を提案したい。

(13) [[太郎が昨日買った][の]]本

表面には現れない nominalizer の「の」が存在し、これが古代語の名残として現代語にも残っている「が・の」交替（「太郎が/の買った本」）を誘引し、また幼児の誤用例は、RC 内の述語が [+ finite] の時には「の」が削除されるとする、隣接性条件 (adjacency condition) がまだ未習得であるからだと考えられる。要するに、日本語 RC は「大統領のトランプ」と同様に、「太郎が昨日買ったの」と「本」が、いわゆる同格関係 (apposition)、つまりイコール関係であり ((1) の観点からは、parataxis と hypotaxis の中間段階と言えよう)、その関係性は、分裂文 (cleft sentence) の「太郎が昨日買ったのは本です」と同一線上にあると言えよう。このように名詞化節と名詞が並列されている構造は、例えば songbird のような複合語と根本的には変わらない。更に (13) の構造は、第2章で指摘した、意味論的・語用論的、つまりフレーム意味論に基づいた、RC 内述語と主要部名詞との統合的フレームマッピング (mapping) に対して、統一的な説明を与えることを可能にするのである。

4. 日本人英語学習者の英語 RC 習得へのルート

これまで見てきたように、日本語と英語の RC はその発達過程も含めて、根本的に異なった仕組みで成り立っている。最も重要な相違は、英語は、wh 移動という規則によって統語的に派生される、極めて緊密な RC-Head の不可分一体の関係であるのに対して、日本語は、*pro* (ゼロ代名詞) の存在を前提とした、意味論的・語用論的にとっても緩やかな結び付き方だということである。この類型論的相違を本質的かつ徹底的に理解しない限り、英語 RC の習得はありえない。その発達過程及び表層形式からも明らかかなように、wh 疑問詞がその根底にあるわけだから、まず wh 疑問文の完全習得が大前提とならなければならないはずである。wh 移動によって生じた gap を RC 内に見つけ、それと wh 疑問詞との間の filler-gap dependency を確立することこそが、不可欠なのである。日本人学習者の問題点は、wh 疑問文と RC を全く別の構文として捉えていることであり、同一規則である wh 移動の関与という観点が欠落している。その原因の一つには、that の存在があるように思われる。第3章でも明らかにしたように、that は OE からの残存物であり、その指示代名詞としての起源から、complementizer (補文化辞) として、RC だけではなく、例えば、I know that John is a criminal. における that や、第2章の(5)のいわゆる同格節を導く that としても使用されている。その多機能性ゆえに、英語学習者は that を使いたがるが、その頻度の高さを度外視してでも、RC 学習初期段階における that の導入は避けるべきであろう。まず wh 移動を確実に習得させた後に、その代替手段として指導するのが適切だと思量される。

次に、英語児による RC の第一言語獲得からのデータも、日本人英語学習者にとって大変示唆に富む。一般的に、母語話者にとっても習得に関しては難易度があり、その知見は外国語学習者にとっても大いに役立つと考えられる。次例は実際に3歳の英語児が発した英文である。

- (1) a This is the sugar that goes in there.
- b Here's a tiger that's gonna scare him.

(1)は最も頻度の高いいくつかの要素が詰まった schema となっている。

(2) PRO be N[Rel ϕ V X].

MC が提示文 (presentational sentence) としての機能を持ち、主語には代名詞類、繫辞 (copula) の be 動詞、その後名詞、それが RC で修飾され、その主語位置に gap があり、その述語が自動詞、という文型になっているのだが、これが最頻出パターンである。その理由は比較的分かりやすいのではなからうか。第一言語獲得ということを考えると、まさに幼児は here and now の状況下に置かれており、今、目の前の具体的な物を指し示し、その特徴付けを行っているのである。また主語の関係節化が容易なのは、通常の単文と同一語順だからである。その意味では、日本人英語学習者にとっても、まずこの文型からスタートするのがベストではなからうか。その後、It's something that you eat. \Rightarrow I want to see some ducks that do that too. \Rightarrow I gon draw everything I like. (これらもすべて実際に観察された例である) といった順序で拡大していけばいいのではないか。つまり、(2)の次に頻度が高いのが、RC を含む名詞の MC での働きが、目的語の場合であり、また RC 内の gap も主語の次に頻度が高いのが、目的語である。実際に MC の主語に RC が付いた例はないに等しく、この理由は、次の(3)のような schema となり、parsing (統語解析) の観点から、一般に困難を伴うと言われている、center-embedding (中央埋め込み) 構造を持つことになってしまうからであろう。

(3) [N[Rel ϕ V X]] V X.

要するに、MC の主語と述語の間に RC の述語が介在するため、主述関係の理解に困難が生じるわけである。従って、このようなパターンを初期段階で導入するのは禁物であろう。

大人の使用頻度からも有益な情報が得られる。MC の構造に関しては、口語と文語の差はあるものの、第一言語獲得と似た傾向を示しており、繫辞文と他動詞文の頻度が高い。RC 内の文法関係に関しては、文語では圧倒的に主語からの関係節化が多く、

口語では主語と目的語が均等に現れる。RC 内の動詞は第一言語獲得とは異なり、口語・文語を問わず、ほぼ他動詞が占めている。

ここまでの幼児と大人の RC 使用の実態調査から明らかになったように、MC では繫辞文から他動詞文へ、RC では主語から目的語へ、という導入順序が最も自然な流れだと言って差し支えなからう。このようにできるだけ学習者への負荷を軽減する配慮は必須であり、少しでも RC 習得に貢献すると確信する。

5. 結 論

英語 RC の習得は、日本人英語学習者にとって最大と言っても過言ではないほど、大きな頭痛のタネであるのだが、そもそもそれは何に起因するのか、という疑問が、この論考の出発点であった。その正体を暴き出すために、第2章では、日本語は単に RC だけではなく、一般に連体修飾節として一括りにされる表現の構造が、同一であることを明確にした。その総称として NMC と名付けた。その構造の基盤となるのは、*pro* である。日本語は、文脈上分かり切った人や物は明示的に表現しない言語であり、ゼロ代名詞でそれらを表す。そして特に RC では、フレーム意味論の枠組みに従うと、RC 内の述語によって想起されるフレーム中の役割が、主要部名詞と合致する場合に、RC としての解釈が成立するわけである。それとは対照的に、英語 RC は、統語規則としてヨーロッパ等の言語の中核に位置する、wh 移動によって派生され、あくまで統語現象として扱われるべきものであり、意味論的・語用論的な事象ではないことを明らかにした。逆に同格節には wh 移動は関与せず、意味論的に解釈される。両言語の本質的な違いは、日本語における gap は音声化されない代名詞であるがゆえに、その先行詞が解釈的に導き出されるが、それに対して、英語の gap は wh 移動という統語規則によって、本来そこにあったはずの要素が文頭に移動した結果として、生み出されるものであり、wh 語との同一指示関係によってその存在が保証されるということである。

第3章では、この大きな日英 RC の類型論的相違が、通時的観点から見ると、英語 RC の発生には integration が、日本語 RC には expansion が関与し

たことから生じたことを明確化した。つまり、前者では、本来独立した2文が統合のプロセスを経て、1文となり、そこにwh移動が関わることによって、完全な埋め込み文となったわけである。その意味で、主要部名詞への依存度は極めて高い。ところが後者は、本来完全な名詞化節(nominalized clause)として主要部名詞に組み込まれていたのだが、動詞活用形における終止形消滅に伴う連体形への統合によって、名詞としての性格が低下し、それに反比例して文としての性格が高まり、同時に自立性も増すことによって、主要部名詞への依存度が低下した結果として、hypotaxisの性質を強く帯びることになったのである。それを反映するべく、RCをappositionとして導入する新たな統語構造も提案した。

第4章では、前2章の議論を踏まえ、英語学習者として、英語RCにおけるfiller-gap dependency、つまりwh語とその移動によって生じた ϕ との繋がり認識が、いかに重要であるかを強調し、英語母語話者による第一言語獲得、及び大人の使用実態の調査から、高頻度のパターンを抽出し、日本人英語学習者が従うべき指導手順を提案した。

引用文献

- Alexiadou, A. et al. (eds.) (2000) *The Syntax of Relative Clauses*. John Benjamins
- Diessel, H. (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*. Cambridge University Press
- Frellesvig, B. (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge University Press
- Givon, T. et al. (eds.) (2009) *Syntactic Complexity*. John Benjamins
- Haiman, J. et al. (eds.) (1988) *Clause Combining in Grammar and Discourse*. John Benjamins
- Harris, A.C. and L. Campbell (1995) *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge University Press
- Heine, B. and T. Kuteva (2007) *The Genesis of Grammar*. Oxford University Press
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社
- 金水 敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 (2011) 『文法史』 岩波書店
- Matsumoto, Yoshiko. (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese*. John Benjamins
- Matsumoto, Yoshiko et al. (eds.) (2017) *Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia*. John Benjamins
- 中尾俊夫(編著) (1990) 『現代の英文法』 大修館書店
- 小田 勝 (2007) 『古代日本語文法』 おうふう
- Ohori, Toshio. (ed.) (1998) *Studies in Japanese Grammaticalization*. Kurosio Publishers
- Saito, Mamoru, K. Murasugi and T.-H. J. Lin (2008) "N-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247-271
- 竹沢幸一・John Whitman (1998) 『格と語順と統語構造』 研究社
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I』 くろしお出版
- Wiechmann, D. (2015) *Understanding Relative Clauses*. De Gruyter